

西アフリカ(セネガル)における調査を終えて



笑顔のまぶしいセネガルの子どもたちと(本人左端)

文 秋 山 吉 功
(Akiyama, Yoshinori)
教育学部

西の国への期待と不安

平成九年度から広島大学・広島県・備ひろしま国際センターの協力のもと、実施を予定している研修コース「西アフリカ(仏語圏)諸国 初等教育行政」に関し、研修ニーズを把握し的確なカリキュラムを策定するために、平成九年一月二十日(月)〜平成九年二月一日(土)の間、セネガル(主にダカール)で調査を行うことになり、幸か不幸か(費沢です)、私に調査団(構成:広島大学・広島県・広島県教育委員会・JICA中国国際センター)に参画しないかと庶務部長からお話をいただきました。引受けはしましたが、当初は「アフリカ」「二週間の期間」という

こともあり、期待よりも不安の方が大きく、胃の具合も悪くなったりしましたが、センター試験直後の一月二十日、期待と不安の中を予定どおり出発しました。

希望金額を言って帰る振りをすれば必ず引き止めるから、それから商談が始まると言われ、電卓を手に悪戦苦闘の末、ほぼ希望金額で購入することができました。

滞在中

今回の出張は右記のような目的のため、国家機関等の訪問が多く、訪問した際には日本がセネガルに対して世界銀行、ドイツ等と共に「教室の建設と改修」の支援を行っていることもあり、各機関とも高官の方が出席され、日本の支援に対して身に余るようなお礼を言われ、また親切に対応していただき、こちらの方が恐縮する程でした。

広島駅で団員全員が集合し、午前六時五十三分発「ひかり82号」にて新大阪駅で乗り換えて、初めて見る関西国際空港に向かいました。日本(関西国際空港)を午前十一時五十分に出発し、パリに着いたのが午後五時十分(日本時間午前一時十分)であり、ホテルにチェックイン後、市内を少し散歩し、ホテルに帰り翌日の打合わせを済ませ、ベットに入ったのですが目が冴えてなかなか寝付けません。平素余り本を読まない私ですが、本を読んでみても効果がなく、やむなくホテルの冷蔵庫から缶ビールを取り出して飲みましたが、これも効果がありませんでした。

時差ボケ

気候については、歩いている移動は「スリ」も多く危険なこともあり、車での移動がほとんどで暑さも余り感じませんでした。外の気温は日中で三〇度前後、夜はセーターがいるほどで、とても冬とはいえずアフリカにきているような気がしませんでした。しかし一番暑い日は三十四度まで上がり、肌を刺すような日差しは、さすがアフリカだと感心(？)しましたが、日本のように湿気はなく汗が出るようなことはありませんでした。

その夜はとうとう一睡もできないまま、「パリ」の夜明けを迎えることになりました。次の日は、ダカールへの移動だけで少しは楽でしたが、眠れることに期待をしながらダカールの夜を迎えたのですが、十一時、十二時と時間は過ぎていきましたがなかなか寝付けなく、経験された方はお分りかかと思いますが、あの時は本当に情けなくなり、今までどうやって寝ていたのだろうと真剣に考え悩みました。何とか考えないよう努力し、その日は数時間眠ったような気がしました。

疲れの溜まりかけた日曜日は、昔アメリカへ売られていく奴隷を収容していた島(グレイ島)へ行き、昔の奴隷社会の一面を見た気がしました。また、現地人が製作する木彫りを買に出かけました。通訳の方からは売値の二分の一から三分の一で購入するよう言われ、そのためには欲しそうな顔をしては駄目で、最初は

希望金額を言って帰る振りをすれば必ず引き止めるから、それから商談が始まると言われ、電卓を手に悪戦苦闘の末、ほぼ希望金額で購入することができました。

その後数日間は、毎日一・二時間毎に目が覚める生活が続きました。これが時差ボケというものだと思います(現地の人たちなど経験された方は、時差ボケ解消には一週間かかると言われ、少し安心しました)。ちなみに、帰国後も数日間は毎日夜中の二・三時頃目が覚めていましたが、今はぐっすり眠ることができ幸せを感じております。

食生活

出発前の不安の一つである食生活についてですが、連日日替りメニューで、フランス料理・イタリア料理・カンボジア料理・ベトナム料理・中華料理、もちろんセネガル料理も体験させていただきました。これも通訳の方がセネガルを何度も訪れており、ダカール市内の料理店を良くご存知で、また、店の方とも知り合いくらいで、本当に安心して美味しく食事をすることができました。驚いたのは量の多さで、前菜・主食・デザートともボリュームがあり、とてもデザートまで食べ切れない状態で、量・体調も考慮し、好きな肉を控え魚中心の食事をしました。さらに「地ビール」も思った以上に結構いける味で、団員の間では「太って帰れば、現地地何をしていったんだ」と言われるのではないかと心配をするほどでした。

ダカール最後の夜は、市内で一番高級な店(フランス料理)に案内していただいた。隣には「カジノ」があり、また、この時期セネガルはリゾート地となつてお

無事帰国

今回の出張は、団長をはじめ団員ならびに通訳の方に恵まれ、事故もなく、また体調も崩さず無事帰国したことを喜ぶとともに、他機関の人との出会いを大切に、今後の仕事に少しでも役立てたいと思います。

最後になりましたが、本当に良い経験をさせていただいた関係各位に、深く感謝申し上げます。



今村外治先生のご逝去を悼む

名譽教授今村外治先生は、平成九年二月十九日夕刻、九十五歳で逝去されました。先生は、昭和十八年に広島文理科大学に地学科・地質学鉱物学教室が創設されると同時に教授として迎えられ、いわば教室の創設者である。昭和四十年に停年を迎えられるまで二十二年もの長きにわたって、常に教室の育成と発展を念願とされ、学生や後輩の指導に専念された。先生の創設された地質学鉱物学教室は、平成四年に地球惑星システム学教室へと改組拡充された。



北村靖治先生を偲んで

名譽教授北村靖治先生は、平成九年二月二十一日、七十歳で逝去されました。先生は、昭和二十四年広島大学皆実分校に赴任されて以来、四十一年間の長きにわたって、教養部、総合科学部において、体育実技や運動方法学の研究と教育に貢献されました。特に、剣道とアーチェリーの運動解析に人間工学的な動作・時間研究法を適用し、数々の成果を挙げられました。また、フランスで開催された第二十七回世界アーチェリー選手権大会日本選手団団長として重責を果たされました。



そんな先生の真骨頂は、宴席で参加者が妙に楽しく元気になる拍子はづれの歌と、わが国を代表するほどの剣道の腕前です。剣道で相手が打ち込むその前にこちらが打ち込む「先の先」は先生の得意技ですが、その場を読み切れない未熟者は、今だに直面する難問に「先の先」を打てずじまいです。衷心からご冥福をお祈りいたします。

総合科学部保健体育講座 調枝孝治(ちようじ・こうじ)